

大賞

星霜

野永孝平

「お父さんが先ほど亡くなりました」

家に着き受話器をとると、留守電には淡々とした声で病院からの訃報のメッセージが入っていた。

ああ、と私は軽く溜息を吐いた。随分前から病床にあったが、先日急激に病状が悪化し、もう数日ともたないと医者から告げられていたそうだ。親戚から「最後は皆で看取ってあげましよう」と言われ、私は急遽仕事の予定をキャンセルし、父の実家に来ていた。それでこれから病院に向かおうという矢先だったが、死に目には間に合わなかった。不思議と、残念だという気持ちは無かった。頭の中には葬式の段取りが浮かぶばかりで、胸には一片の悲しみも湧き上がってこない。自分はこんなにも不義理な人間だったのだろうか。しかしいくら自分の胸の内をさらしても、悲しいという感情を見出すことはできなかった。泣こうと思っても涙が出てこない。

しばらく電話機の前で立ちすくんだまま呆けていると、病院から電話がかかってきた。反射的に受話器を手にとると、憂いを帯びた叔母の声が聞こえてきた。叔母はこれから遺体を斎場に運び通夜の準備をするので、それまでに実家の片づけをして

おいてほしいと伝えてきた。遺体と対面するよりそちらの方が幾分か気が紛れるだろう。私は了承し、今後の段取りを相談して、受話器を置いた。身内は皆病院に出払っていて、今家にいるのは私一人だ。ふと家の中を見渡す。築数十年と思われる木造建築は、長いこと家主を欠いていたためか、人の面影を失った寂寥感を漂わせていた。私はまた溜息をついて、遺品の整理を始めた。あまり物に執着がない人だったため、家の中には必要最低限の家具以外、ほとんど物がなかった。仕事場になっていた部屋にも、本棚に数冊の本が転がっているだけで、部屋の中央にはぼつりと大きな文机が置かれていた。その光景を見た瞬間、私は何かに惹きつけられるようにして、木製の古びた文机に近づいていた。机上には、うっすらと埃が積っていた。埃を払って、これまた何となしに机の引き出しを開けた。そこには、何冊もの大学ノートが几帳面に並べられていた。その内の何冊かを取り出してしげしげと眺める。表紙にはひとつひとつ何年から何年までという日付がつけられていた。胸の中にわずかにあった背徳感を好奇心で抑え込んで、私は最初の日付が書かれたノートの表紙をめくった。ノートの裏表紙には、すっかり色

あせた写真が貼ってあった。その写真には、まだ生後間もないと思われる赤子を抱いて、満面の笑みを浮かべている男の姿が写っていた。男の顔には見覚えがあった。

『〇〇年 三月八日

気分が悪いという妻を病院に連れていったところ、医者から妊娠二カ月だと告げられる』

ノートにはこの書き出しで始まる日記が綴られていた。そこには父親からみた息子の姿が、日々丁寧に記録されていた。いつしか私は時がたつのも忘れ、日記にのめり込んでいた。頭の中には、かつての父との記憶がよみがえってきた。

私は一人っ子だったということもあり、幼少の頃から両親に溺愛されて育てられた。

特に父の子煩悩ぶりは周囲の失笑をかうほどだった。きかんぼうだった私は駄駄をこねよく両親を困らせたが、父は私のわがままをいつも笑って聞いてくれ、休日には幼い私の手を引きいろいろなところにつれていってくれた。

今でも鮮明に思い出せるのは、私が小学校に上がる前の時分、父ご自慢の望遠鏡を抱えて近所の山に天体観測にいったことだ。

よく晴れた、雲ひとつない夜だった。真っ黒なカーテンに宝石のかけらを散りばめたかのように、満天の星空が広がっていた。私たちはしばしの間、言葉もなく自然が織りなす芸術に見とれていた。私は夜空にひと際明るく輝く星を指して父に尋ねた。

「ねえお父さん。あの白く光っている大きなお星さまは？」

「あれはシリウスっていうんだ。おおいぬ座をつくっている星だよ」

「おおいぬ座？」

「そう。昔の人は夜空に光る星をみて、それらを犬やさそり、女の人に見立てたんだ。よく見てごらん。シリウスがお鼻で、その下に体があつて、どうだい。大きな犬に見えてこないかい？」

「うーん。よくわかんない」

「はは、そうか」

それから父は空を指さしながら、星座にまつわる話を聞かせてくれた。

幼い私は父が語る星座をめぐる神々の物語に夢中になった。

「……そこでゼウスは怒って、プロメテウスは山の頂上に鎖でくくりつけられたといわれているんだ」

「ゼウスっていう神様は、一番偉くて、みんなのお父さんなんですよ。それなのに鎖でしばりつけるなんて、ひどい。お父さ

んは、そんなことしないもん」

幼い私はギリシア神話の主神に対して憤りを隠せなかった。

「そつだね。お前は優しいな」

父は小さく笑うと、私の頭をそつとなでた。私はちよつぴり照れくさくつて、その間ずつとつむいていた。父はそれきり押し黙つて、物思いに耽るように、少し寂しげな表情をたたえて夜空を見つめていた。

〇〇年 三月八日

気分が悪いという妻を病院に連れていったところ、医者から妊娠二カ月だと告げられる。

やっと恵まれた子宝だ。妻に心から感謝したい。

いよいよ自分も父親になるのだ。正直不安も大きい。しつかり育てられるのだろうか。私はいい父親になれるのだろうか。

しかし不安以上に今の私の胸をしめているのは、まだ見ぬわが子への期待と喜びだ。

どんな子なのか。将来の夢は。今から希望が膨らむ。妻に話すと気が早いとたしなめられた。

〇×年 十月二十五日

男子誕生。難産になると告げられた時は恐々としたが、未熟

児ながら無事五体満足で生まれてきてくれた。母体の健康状態も問題ないとのこと。看護師に抱かれながら産声をあげる姿をみて思わず頬がゆるんだ。

抱いてみると、わが子は驚くほど軽かった。

しかし命の重みは両手からひしひしと感じられた。小さな命は、しわくちやの顔で、あらん限りの力をふりしぼつて泣いていた。念願の対面を果たし、自分もとうとう父親になったのだという実感が湧いてきた。

〇□年一月二十五日

命名・悠星^{ゆうせい}。輝き皆を照らすような男になってほしいと名付けた。

両親や親戚、友人から祝福の言葉をいただく。この子の前途が明るいものでありますように。

〇△年八月十日

最近、仕事が忙しくて、家族と過ごす時間がなかなかとれない。妻によると、悠星は七夕に幼稚園の先生から織姫と彦星の話聞いて以来、星に興味^{きょうみ}が芽生えたらしい。私が仕事で帰りが遅くなるときは、よく窓から星空をじっと眺めているそつだ。

明日は久しぶりの休日だ。

悠星を天体観測にでも連れて行ってやろうと思う。

○△年八月十一日

天気が心配だったが、幸いにも快晴で、絶好の天体観測日和となった。

昨日仕事帰りに町で買ってきたピカピカの天体望遠鏡を見せると、悠星はこれ以上ないくらい瞳を輝かせて、まだ日も高いうちから星を見に行こうと言いつつ出した。

妻がたしなめるのも聞かず、悠星は夢中で望遠鏡をいじっていた。値段をいっただら妻は卒倒するだろうが、小遣いを奮発したかいがあつたな、とわが子の満面の笑みをみて思う。少々親馬鹿だろうか。

夕食の準備があるからという妻を残して、私と悠星は日が暮れるとすぐ近所の裏山に向かった。

山の頂上は閑散としていて、心地よい静寂に包まれていた。顔を上げると鮮やかな星空が広がっていた。

「きれいだな」

「うん」

私と悠星は、地べたに寝転び空を見上げながら、いろいろな話をした。幼稚園の先生の話、友達の間で最近流行っている遊びの話、妻のつくる料理の話、それに星の話……

悠星の口からは次から次へ流れるように話がでてくる。私は時に相槌をうち、時に「へえ」と感心し、時にはハハと笑いがらそれを聞いた。

まだ小学校にも上がっていないわが子が、これほど多くのこ

とを話せるのが驚きだった。

ふと、つい最近まで母親の乳を飲んで来たわが子の成長に対する喜びと、いつかこの子も自分の元を離れていくのだという寂しさが、私の胸に去来した。嬉しいような、悲しいような。私は、それきり何も言えなくなつて、黙つて空を見上げていた。暗闇に光る星々が、私たちが親子を優しく照らしていた。

小学校に上がると、私は生粋の悪ガキに成長した。クラスの男子を率いて、山を海を駆け回り、しょうもない悪戯をしては近所の鬮をかい、よく学校に呼び出された。そのたびに方々を巡つて頭を下げるのは母の役回り、家に帰ると私は母にこつぽどく叱られた。そんなときも父は常に私の味方で、「こいつは将来大物になる」と人当たりのいい笑顔で私の頭をぐしゃぐしゃとなでた。母はそんな父に毒気をぬかれて、私はめでたく説教から放免されたものだった。

また父は人を笑わせるのが好きで、友人どうしで集まったときなどはよく冗談を言つては場の雰囲気盛り上げていた。

私と母が喧嘩して、夕食の場が少し剣呑になった時も、父は陽だまりのような笑顔と小洒落た冗句で、冷えた食卓の空気をすぐに氷解させてくれた。

そんな父が私は大好きで、父のような大人になりたいとよく

思ったものだった。

△△年三月月三日

悠星がまた何かしでかして学校に呼び出されたらしい。家内によれば、近所の墓場の墓石をひっくり返したのだそうだ。

墓地を管理している寺の住職もおかんむりで、妻も今度ばかりはひとつもんでやらねばと息巻いていた。私も今回は少々度が過ぎると思い、悠星を自室の書齋に呼び出した。

教師や妻からこっぴどくしぼられたらしく、悠星はすっかりしよげかえった面持ちで現れた。

私は極力穏やかな口調で何故そんなことをしたのかと問いただした。悠星は唇をきつと結び、目元にわずかに涙を浮かべて俯いていた。その姿を見て、この子もやはりまだまだ子供だなと私は胸の内ですく安堵して、もう一度なるだけ優しく尋ねた。

「怒らないから、言つてごらん」
悠星はおずおずと顔をあげ、逡巡する様子で瞳をせわしげに左右に動かしした。

「先輩たちが……」
「なんだ。先輩に脅されてやったのか」

「違う」
「じゃあいったいどうして」

悠星はどこどころつつかえながらも事情を説明しはじめた。

「先輩たちが、卒業するから……。何か悪い出作りをしてあげたいなって思つて、それで、肝試しをしようつてことになって。そしたら、やつてるときに墓にぶつかっちゃつてそれで……本当に、ごめんさい」

悠星は地につくような勢いで深く頭を下げた。私は、その間ずっと黙っていた。尺取り虫のように頭を垂れている息子をみていると、腹の底からぶつぶつと笑いが込み上げてきた。

私はその衝動にまかせて、大口を開けて笑いはじめた。悠星はてっきりまた説教を喰らうと思つていたらしく、突然哄笑しはじめた父親の姿にきよんとしている。私はかまわず笑い続けた。そうしてひとしきり笑いの虫を吐き出すと、ふうと一息ついて口を開いた。

「その肝試しの話は、先生方やお母さんには言つたのかい」
悠星は私がまったく怒つてないことを察したらしく、少し表情を緩めた。

「いや、言つたら、先輩たちに迷惑がかかるから……」
そこで再びうかがうような視線をこちらに向けた。私は目を細めてそれに応えた。

「大丈夫、その話は誰にもしないよ。お父さんと、悠星との秘密だ」

悠星はその一言ですっかり安心したらしい。

その後、嬉々としてまだ私がきいたこともない悪戯の数々まで開陳しはじめた。

その笑顔をみて思った。この子は悪戯が好きなのではなく、人を喜ばせるのが好きなのだと。

中学に上がってからも、父の親馬鹿ぶりは相変わらずだった。部活で泊まり込みの合宿をすれば、父は苦しい家計をやり繰りしてお金を工面してくれた。大会がある時には、仕事を切り上げてでも駆け付けに来てくれた。思春期の私にはそれが少し恥ずかしくて、時に冷たい態度をとったりもしたけれど、心では父にいつも感謝していた。

そんな父が、仕事の出張で数カ月家を空けたことがあった。父のいない食卓は急にならんとして、味気ないものになった。母も心なしかさびしげで、家事をしているときもたびたび「お父さん今頃どうしてるかしらね」と呟いては嘆息していた。そんな母を励まそうと、私も早めに帰宅して家事を手伝うようになった。

母が私に最初に教えてくれた料理は、亡き祖母から教わったというクリームシチューだった。母の料理の腕前は父のお墨付きで、そこの安い外食より美味しかった。けれど生来不器用であった私は、野菜ひとつを切るのにも手間取り、背後で母の

悲鳴を聞きながら、不揃いな野菜の山を生み出すのがやっつと有様だった。料理に関して人一倍厳しい母は、そんな私に徹底的に料理のいろはを叩き込んだ。

ある日のこと、私たちは少し焦げたクリームシチューを食べながら、学校であった他愛もない話をしていった。クラスに気になる人がいるという話題になったとき、私はふと母に父との馴れ初めを尋ねてみたくなった。

「ねえお母さん。お母さんは、どうしてお父さんと結婚したの？」
母は少し驚いたように目を丸くして、それから優しく細めていった。

「どうしたの急に」
「別に。何となくだよ」

訊いたそばから何だか気恥しくなった私は、素っ気なく返した。母は少し口元を緩めて、
「そうねえ。そういえばあなたには、お父さんとの思い出をおんまり話したことはなかったわね」

母はそこで言葉を切って、壁にかけられた写真を見つめた。そこには、若き日の両親と、その間にちよこんとおさまっている幼い私が写っていた。

「お父さんに聞いても、照れ屋だから答えてくれないでしょうね。いい機会だから、話してあげましょうか。お母さんとお父さんがどこで出会って、どうして結婚することになったのか」
それから母は穏やかな調子で語りはじめた。父との出会いの

話、初めてのデートの話、プロポーズの話、私が生まれた日の話……。母の口から語られる自分の知らない両親の思い出を、気づけば私は身をのりだして聞いていた。その晩、食卓の灯は遅くまで消えることはなかった。

△□年四月六日

悠星が中学生になった。真新しい学ランはぶかぶかで、私はその不格好な姿に大笑いしていると、悠星はうっせえと照れ笑いしながら言い返してきた。もう一丁前に反抗期にさしかかっているようだ。

入学式には一張羅のスーツに身をつつんで、保護者席の最前列に陣取った。すこし表情を硬くしながらも胸を張って入場してきた息子の晴れ姿を、私は一生忘れないだろう。

△□年五月十日

悠星は天文部に入ることにしたらしい。今日は私があげた望遠鏡を携えて、友人たちと学校の屋上で天体観測してきたそうだ。悠星が小さい頃に買ってやった望遠鏡は使い込まれてすっかりボロボロになっていた。新しいのを買ってやるうかと言うと、使い慣れているからこれがいいと言われた。少しばかり胸が熱くなる。

△□年八月二日

今日は久しぶりに休みがとれたので、夏休みで暇を持て余していた悠星に天体観測にいかないと誘った。しかし親父とはいやだと一蹴された。悠星はこの夏に入って急激に背が伸び、声変わりもしはじめ、ひと回り大人っぽくなった。そのせいか何だか息子が少し遠くへ行ってしまったような気がする。以前は夕食のときに学校であった話を聞かせてくれたのに、最近は何もない。妻も心なしか私に冷たい。このところ仕事にかまけて家族サービスを怠っていた報いだろうか。夏休みのうちに父親としての立場をとり返さねば。

△□年八月十七日

仕事の調子は申し分ないが、相変わらず息子との距離はなかなか縮まらない。まあ学校の友人とは仲良くやっているようだし、中学一年の男子なんてそんなもんだと割り切った方がいいのかもしれない。それよりも最近気にかかるのは妻の方だ。ときどきしわを寄せて思案顔になるかと思えば、熱に浮かされたようにぼうつとしたりする。どこか具合でも悪いのか、と尋ねても、少し疲れているだけと答えるばかりで要領を得ない。一度病院で詳しく検査してもらった方がいいだろうか。

△□年九月五日

今日、上司から突然呼び出される。思い当たる節もなくビクビクしながら上司の元に向かうと、伝えられたのは半年間の海外支社への異動辞令だった。異動と聞いてすぐ思い浮かぶのは妻と息子の顔だ。海外ともなれば家族を連れていくわけにも行かず、単身赴任ということになる。最近、息子との距離は開く一方だし、妻の様子も少しおかしい。ここで私が半年間も家を空けて大丈夫だろうか。返事はしばらく待ってくれるとのことだったので、今日のところはとりあえず保留にして寝ることにする。

△□年九月十五日

夕食後、妻を呼んで海外異動の話をした。

妻は冷めた表情で「そうですか」と首肯するだけだった。これはいよいよ尋常ではない。新婚当時の甲斐甲斐しく世話を焼いてくれた妻はどこにいったのだろう。心にポツカリと穴が空いたような喪失感がこみ上げてくる。何か妻の気に障るようなことでもしたのだろうか。わが身を振り返っても覚えがない。確かに最近の仕事が忙しく、帰宅が遅くなったたり、休日には疲れて一日中寝ていたりもした。しかしそれも全て家族のために身を粉にして働いているからだ。今度の異動も落ち度があつての左遷ではなく、上司が私の手腕を見込んでのことだった。妻もそれくらい分かっているはずだ。なのにあの素っ気ない態度は

どういうことだ。切ない。侘しい。やるせない。ただ一つの救いは、悠星が私の身を案じてくれたことだ。「家事は俺が手伝うから安心していつてきな」とまで言ってくれた。最近つれないなと思っていたが、やはり優しい息子だった。妻ももう少し……。

いや、ちょっと感情的になってしまっているようだ。妻もパートナーと家事の両立で疲れているだけなのだろう。ここで負担を増やすのは忍びないが、しばらく距離をとって夫婦の関係を見つめ直す時間があってもいいかもしれない。悠星ももう中学生だし、半年くらい父親が不在でも問題ないだろう。明日、異動の件はお受けしますと上司に伝えよう。

△□年十月二十日

今日、海外支社へ出立した。悠星が空港まで見送りに来てくれた。妻は具合が悪いといって家に残った。予定の便が出るまでの間、久しぶりに親子水入らずで話をした。悠星も妻の様子を気遣っているようだった。

「母さんのこと、よろしく頼んだぞ」

そう言って私は息子の肩を軽くたたいた。悠星は少しはにかんでから「大丈夫」と答えた。その姿に私は安心して、最後に手を握って息子と別れた。

△□年十二月二十四日

クリスマスイブ。日本では恋人同士が仲睦まじく過ごすイメージだが、こちらでは家族がそろって食事をしたり談笑したりしながらゆつくりと過ごすのが一般的だ。支社の同僚もみな故郷の家族の元に帰っていった。私も家族と過ごしたいところだが生憎仕事が出積りで、会社の寮で一人寂しく夜を越すことになりそう。不意に妻の声が聞きたくなり、仕事が一息落したのを見計らって、国際電話を家に掛けた。呼び出し音が一分ほど鳴った後、電話に出た息子の声はかすれていた。

「おお悠星か。メリークリスマス」

「ああ父さん。仕事はいいの」

「いや、今ひと山越えたところだ。何か無性に悠星と母さんの声が聞きたくなつてな、思わず電話してしまった。そっちはどうだ。元気にやつてるか」

「うん、まあぼちぼち」

そういう息子の声には明らかに覇気がなかった。私は声の調子を上げて返す。

「どうした、元気がないな。母さんは何してる？ 今日は何パーと休みだろ」

「母さんは……出かけた。友達と用事があるんだってさ。晩飯はこれで食えて千円くれたけど」

私は言葉をつた。クリスマスイブに子供を置いて友人と食事……。以前の妻からすれば考えられないことだった。それから電話で何を話したのか、よく覚えていない。受話器を置いて、

私はソファに身を横たえた。初めて出会ったときの妻の笑顔が脳裏をよぎった。

今夜は、眠れそうにない。

△×年二月十五日

仕事は相変わらず山積みだ。同僚は私が何も言わないのいいことに、面倒事は全て押しつけてくる。しかし今はそれが逆にありがたい。仕事に忙殺されているうちは、少なくとも家族のことは考えずにすむ。

去年の暮、妻と電話で激しく口論して以来、家には電話をかけていなかった。あの晩、妻は私を仕事だけが取り柄の機械人間と罵った。以前の私なら反発しただろうが、今思えばその誹りは的を射たものかもしれない。

私の両親は、私に常に一番であることを要求した。幼い私にとってその期待に応えることがすべてだった。私は級友たちとつるむことも、恋愛にうつつを抜かすこともせず、死に物狂いで勉強した。当然のごとく私はクラスで孤立した。しかしそのことを別段寂しいとは思わなかった。私には理想が……。

△×年四月二十五日

長いようであつという間だった海外勤務を終え、今日家路に着いた。我が家の戸を開けるのが、やたら億劫だった。門を抜け、玄関の前に立つ。窓には明かりが灯っていた。鍵は開いている。

このまま笑顔で戸を開けて「ただいま」と言えばいい。それだけのことだ。しかしそれができなかった。自分の家なのに、気づけばインターホンを鳴らしていた。軽いチャイムの音が、妙に耳に響く。しばしの沈黙が、やけに長く感じられた。やがてトタトタと床を歩く音が聞こえ、内側から扉が開いた。開けたのは、少し日に焼けて、体つきも男らしくなった息子だった。私は心のどこかで安堵していた。

「ただいま。母さんは」

「いないよ。このところしょっちゅう出かけてる。今日も家に帰るなりお金置いてどこかに……」

そういって悠星はもう憤れっこだとばかりにため息を吐いた。私は「そうか」と呟いて家上がった。すっぱいにおいが鼻についた。不審に思って台所に行くと、そこには異様な光景が広がっていた。

流しにはあふれんばかりに皿が放置され、生ゴミに蠅がたかっている。机の上にはレトルトや冷凍食品のパッケージが山積みになっていて、乗りきれなかったとみえるゴミくずが床にも散乱していた。とても人の住んでいる場所とは思えない。妻は人一倍きれいで好きで、台所はいつも念入りに手入れしていたのに。悠星が気まずそうに私の傍らに立っていた。

「いつ頃からだ」

私は極力怒気を抑えた声で尋ねた。

「え」

「いつ頃からこんな有様だったんだ」

悠星はほそほそと語り始めた。

「母さん、今年の初めごろからお酒飲み始めてさ……。最初は少しずつだったんだけど、だんだん量が増えていって、昼間から飲むようになって。そのころには家事も全然なくなっていて……。俺も最初の頃は片づけとかしてただけだ」

「どうして父さんに言わなかったんだ」

そこで悠星は俯けていた顔をきつとあげ、刺すような視線を向けてきた。

「父さん、ほとんど電話してこなかったし。それに話があるっていつても、疲れるからってすぐに切っちゃうじゃんか」

そう吐き捨てるように言うと、自室にこもり、出てこようとしなかった。

△×年四月二十六日

昨夜、妻は酔い潰れて帰宅した。玄関で出迎えても、妻は目をそらすばかりで何も言わなかった。その態度に、私の中で何か切れた。気づけば、私は、妻の頬に拳をしたたかに打ちつけていた。妻は私を睨み、ふらつく足取りで出ていった。夜が明けた今も帰ってこない。妻と出会ってから、初めて手をあげた。愛する妻に手をあげた。今も右手に嫌な感触が残っている。

ふと、壁に掛けられた写真に目をやる。いつ頃撮ったものだろうか。そこには、私たち親子三人が、笑顔を浮かべて並んで

いる姿が写っていた。

中学二年の秋頃、母が突然家からいなくなった。私は寂しくて、悲しくて、家にいるときは部屋に閉じこもってずっと泣いていた。勉強も部活もどうでもよくなって、学校にも行かなくなった。父はそんな私を無理やり外に連れ出すことはしなかった。ただ毎日欠かさず私の部屋の前にたつて、声をかけ続けた。どんなに仕事が忙しくても、温かい食事をつくり続けてくれた。母がいなくなつて一番悲しんでいるのは、きっと父の方だったのに。

未熟な私はそんな父の優しさが理解できず、父のつくつてくれた夕食をひっくりかえしたこともあった。その日私は担任から電話で少しきつい一言を言われ、荒れていた。不機嫌にぶつぶつという私に、父は笑顔で夕食を差し出した。それは母がいたころよく作ってくれたクリームシチューだった。それを見た瞬間、私の中に今までため込んでいたさまざまな感情が爆発した。気づくと、私は父が持っていた夕飯を床に叩きつけていた。皿が割れ、白いシチューが床に広がっていく。甘ったるいにおいが鼻についた。謝らなげや。すぐにそう思ったけど、私の口は自分のじゃないみたいに重かった。父はそんな私を叱ることもせず、少し寂しげに微笑んで床に転がった食器を片付けはじめ

た。その姿に耐え切れなくなって、私は自分の部屋にとびこみ、ドアの鍵を閉めて、ベッドに体をうずめた。その夜は、涙が止まらなかった。どうしようもなく悲しくて、でもその悲しみをどこにやればいいのか分からなかった私は、ただひたすら泣き続けた。そしていつの間にか眠っていた。

翌朝、私が目を腫らして部屋から出ると、父はすでに仕事に出かけたらしく、家の中は静まり返っていた。ふと少し前まで三人で囲んでいた食卓に目をやると、ラップがかかった皿と、短い手紙が置かれていた。

『生まれてきてくれて、ありがとう』

昨夜散々流して、もうからからはずの目から、また涙があふれてきた。そのまま床にしゃがみこんでしばし茫然としていた。時計に目をやると、父がもう会社についている時間だった。私は携帯をとりだして、父の番号を押しはじめた。

△×年十月二三日

あの晩の一件以来、妻は家に寄り付かなくなった。昼間どこで何をしているのか全く分からない。悠星ともほとんど会話しなくなっていた。学校から帰ると、すぐ自分の部屋にこもって

出てこようとしない。ときどきベランダからゴソゴソと物音が聞こえる。どうやら天体観測をしているようだ。今夜はさわやかな秋晴れで、私の部屋の窓からも星がよく見えた。

△×年十一月十三日

今日は妻との結婚記念日だった。仕事帰りにプレゼントを買い、わずかな期待を抱いて帰宅する。しかし、案の定家に妻の姿は無かった。その代わり、机の上に見慣れない書類が置かれていた。

離婚届。

悪い冗談だ。これを書いている今も信じられない。夢ならはやく覚めてくれ。

しかしそれは現実だった。

数日後、妻が雇ったという弁護士を名乗る男が家を訪ねてきた。男は、このまま黙って離婚してくれば、財産はすべて私のもので、息子の親権も譲るといふ妻の主張を伝えてきた。男が人のいい笑みを浮かべて話をしている間中、私は心ここにあらずといった調子で机の上の書類を見つめていた。私の心の中には、かつての妻との思い出が駆け巡っていた。

目から涙が一筋こぼれた。

気づけば、私は男にのせられるまま書類に署名していた。男

は最後に一言二言つぶやいて去っていた。悠星に離婚したことを伝えたが、息子は「そう」とつぶやいただけで、それきり何も言わなかった。

私は妻が去りがらんとした家の中を見渡した。唯一の心の拠り所であった一家団欒は、もうどこにも無かった。

私は母の不在から何とか立ち直り、地元の高校に進学した。高校合格の知らせを、父は手放しで喜んでくれた。

部活とバイトと勉強におわれる日々。毎日くたくただったが、その頃の私の生活は中学時代とは比べものにならないくらい充実していた。何より、父にもう心配はかけたくないという思いが強かった。

父も老いた身体に鞭打って働いていた。高校を卒業したらすぐに就職して早く楽をさせてあげようと、私は家事をこなす傍らむしやりに勉学に励んだ。

このころには、悲しみも薄れ、父と二人で母との楽しかった思い出を語れるようになっていた。

○×年十一月二十日

妻が家を出て行ってから二年が過ぎた。あれから悠星は不登校になり、部屋から一步も出なくなった。最初のころは私も毎日声をかけていたが、だんだんと息子と接するのが億劫になり、食事だけを部屋の前に置いてまったく話さなくなった。

○×年二月一日

今日、中学時代の担任と「児童自立支援施設」の職員と名乗る男が訪ねてきた。なんでも、いろいろな事情で不登校になったり、非行にはしたりする子供たちの心のケアや、自立のサポートをする施設があるそうだ。まだ二十代半ばくらいだろうか。男はしわ一つないスーツに身をつつみ、いかにも好青年といった笑顔を浮かべて話しかけてきた。

「今、悠星君とお父さんに必要なのは心の休息です。そのために、一度離れて生活してみることも必要ではないでしょうか」

男はいつかの弁護士を思わせるような口調で、そのような趣旨のことをオブラートに包みながら話した。担任は、男が話している間、首を縦に振って頷くのみだった。

正直、日々の仕事に追われ、埋まらない息子との溝に憔悴してきたっていた私に、この申し出は福音だった。

二人が帰ったあと、私はドア越しに息子に施設のことを説明した。

息子からの返事はなかった。

○×年十月二日

部屋に食事を運びに行くと、ドアの前に短い手紙が置かれていた。

『この家以外だったら、どこでもいい』

○×年十一月二五日

今日、息子を見送った。

息子が部屋から出て荷造りをしている間も、職員につれられ車に乗り込む際も、私たちは一言も言葉を交わさなかった。

施設の車に乗せられ出発する際、息子は私を一瞥した。怒りと悲しみと寂しさを含んだような暗い瞳が、今でも私の頭から離れない。

息子の部屋を整理した。部屋に置かれていたはずの望遠鏡は、いくら探しても見当たらなかった。

高校を卒業した私は、東京の小さな会社に就職することになった。

出立の日。父は黙って何度も何度も私の手を握った。私は、

気恥ずかしさを覚えながらもそれに応えた。父は顔を赤らめながら、泣くのを必死にこらえているようだった。
「元気でな」

父はただ一言そうつぶやいた。その場に留まっていたら号泣してしまいそうだったので、私は溢れてくる涙をこらえながら東京行きの列車に乗り込んだ。

父は、視界から消えるまでずっと手を振っていた。

□△年十月十二日

残業を片づけ、深夜に帰宅。出迎える者がいない我が家にもだいが慣れてきた。時折、施設から息子の近況を伝える電話がかかってくる。毎回、元気にやっているならそれでいいとだけ答えて、すぐ切るようにしていた。息子も家族のことはおくびにも出さずにいるようだ。それでいい、と思う。息子は新しい人生を歩き始めるのだ。もう私は必要ない。

□△年十一月十三日

街中で数年振りに妻の姿を見かける。妻は、楽しそうに笑っていた。白いコートに身を包んで、初めて出会ったときを思い起こすような、美しい笑顔を見せていた。

妻の、元妻の傍らには、見知らぬ若い男がいた。

男は、下卑た笑みを浮かべて妻の肩に手をまわしていた。かつて心から愛した女の姿は、雑踏に紛れてすぐに見えなくなった。

家に帰っても、妻と男の顔が頭の中にしきりに浮かんできて、心を締め付ける。

私は、何のために生きてきたのだろう。

幼少の頃から、両親はいい大学に行くこと、上流企業に就職することだけを私に要求してきた。私は死に物狂いでその期待に応えた。そして、世間では一流と言われる大学に進学し、同期の中でいち早く上流企業の内定を取った。順風満帆のはずだった。しかし心の中はいつも満たされなかった。常に何かに飢えていた。それを満たしてくれたのが、妻だった。息子だった。私の生きがいには家族だった。そのために自分の楽しみはすべて犠牲にして、がむしやりに働いてきた。しかし気付けば、家族はバラバラだった。

もう私には、何も残っていない。

日記の最後の方は乱雑に書きなぐったようで、ほとんど読めなかった。けれど、うねるように並ぶ文字からは、家族を失った男の懊悩と悲壮感がひしひしと伝わってきた。

「おじいちゃん……」

私は、日焼けして黄ばんだノートの表紙を、そっと指でなでた。この日記は、亡き祖父が書いたものだった。

父・悠星は、娘の私が祖父母のことを尋ねても、かたくなに答えようとしなかった。普段陽気な父が、その時ばかりは何かをこらえるような表情で顔を俯けて、じっと黙っていた。そんな父の姿に小さかった私も何かを感じ、それきり父に祖父母のことを尋ねることはしなかった。だから父方の親戚から、突然に「祖父の病状が悪化したから帰ってこい」と言われてもいまいちピンと来ず、どこか冷めている自分がいた。

「おじいちゃん……」

もう一度つぶやく。しかしその響きには全く実感がこもらなかった。父は、こんなことがありながらも、どうして今笑っていられるのだろう。私も中学二年の時に母を急病で亡くした。それでも私には父がいた。父はいつでも私を支えてくれた。しかしその父に、両親から半ば捨てられたような過去があったことが衝撃だった。不意に、母がまだ生きていたころに交わした会話の記憶がよみがえってきた。

それは、父が不在で、家に私と母しかいなかったときのことだ。私は、母に父との出会いについて尋ねた。

「会社で初めて会った頃のお父さんは、いつも仏頂面で、世の中の全てを憎んでいるみたいだったのよ」

いつも微笑を絶やさぬ父に、そんな殺伐とした時代があったとは信じられなかった。

「その話ホントなの」

私は疑いまじりで尋ねた。母は苦笑して、

「ホントよ。その頃のお父さんは、怖くて近寄りたいたい感じだった。だけど、うーん、何ていえばいいのかしら」

母をすこし困った表情を浮かべて言葉を探しているようだった。

「そう、とっても寂しげで、悲しそうに見えたの。ホントは笑いたいののに、笑い方を忘れてしまったみたいだった。なんだか、ほっとけなくてね。それから、猛烈にアプローチしたの。お父さんはそのころ女性不信だったから、口説くのは大変だったけどね」

「お父さんは小さいころからそんな性格だったの」

「いいえ。昔は、あなたみたいに、いたずら好きで、人を喜ばすことが大好きな、ひょうきんな子供だったみたい」

母は、そこで一拍おき、すこし声を低くして言葉を継いだ。

「昔、お家でいろいろあったみたい。お父さん、つまりあなたのおじいちゃんとも、うまくいかなくてね、高校生くらいのときは、施設で過ごしたそうよ」

私は父が微笑の中に時折みせる、寂しさの理由が分かったような気がした。母は昔を懐かしむように遠くを見つめた。

「初めてのデートは、お父さんが誘ってくれたのよ。がちがちに固まった顔をして、突然、『今夜、星を見にいきませんか』っていわれた時にはちょっとびっくりしたけどね。その夜はよ

く晴れていて、とつてもきれいな星空だったわ。お父さんはその頃から本当に星が好きでね。空を指差しながら、あの星はどいう名前で、地球から何光年離れてるんだとかいう話を、子供みために目をキラキラ輝かせながら話すの」

父に連れられ天体観測に行った時のことが思い出された。父は私にもよく星の話をしてくれた。私が中学校に上がって陸上部に入ってから、熱心に天体観測にしようかと誘ってきた。練習で疲れるからと冷たくあしらうと、父はすこすこと部屋に引き下がって、年季がはいってボロボロになった天体望遠鏡を磨いていた。

それから私は重ねて訊いた。

「それで、プロポーズはどっちからしたの」

母はちよつと顔を赤くして、コップに入っていた水を口にふくんだ。

「お父さんからよ。その日もちようど二人で星を見にいったの。二人でぼうつと夜空を眺めてたら、お父さんが唐突に、『大事な話がある』って言い出したの」

「それでそれで」

「それでね……」

母はそつと私の耳元に顔を近づけて囁いた。

「あとは秘密」

「ええー何それ。教えてよ」

肝心な所をはぐらかされて、私が頬をふくらましていると、

母はふふんと笑った。

「あんたが気になる男の子に告白するときがきたら、教えてあげるわよ」

「なんかズルイ、それ」

それから私たち母娘は声を揃えて笑った。ひとしきり笑ったあと、母は一息ついてまた語りだした。

「その申し出を受けて結婚して、家を買って、あなたが生まれて。いろいろあったわ。今思えばくだらないことでたくさんけんかもしたし」

「へえ、お父さんとお母さんがけんか……」

両親は近所でも評判のおしどり夫婦で、私は物心ついたころから二人が言い争う姿を見たことがなかった。

「私は、根っからの頑固者だったから、なかなか謝ろうとしなかったんだけどね。けんかした後は、すぐにお父さんの方から『俺が悪かった』って土下座してくるの。それは明らかに私の方が悪いときも変わらなかったわ。何だか申し訳なくて、些細なことでも怒らないようになったの」

「嘘つき。お母さん、しょつちゅう私に怒鳴るじゃん」

「あら、そうだったかしら」

そうしらを切る母の言い方がおかしくて、私たちはまた笑った。そして、私はいちばん気になっていたことを訊いた。

「お父さんは、今幸せ？」

中学生だった私は、不安げな眼差しで母を見た。母は、うん

と調子よく頷いて、

「とつても幸せでしょうよ、こんなかわいい奥さんと娘がいるんですから」

そういつて笑う母の顔はとびきりまぶしく、輝いて見えた。

日記を抱えたまま座り込んでいると、玄関のチャイムが鳴った。叔母だった。叔母は一度家に帰ったのだろうか、喪服に身をつつんでいた。

「星奈ちゃん、ごめんさいね。家の片づけひとりで任しちゃって。微妙な時間帯だけど、斎場の方では今晚お通夜をしてくださるみたい」

叔母は看病の疲れと祖父の死に対する動揺をにじませながらも、張りのある声で話した。私はふと気になっていたことを尋ねる。

「そうですね。それで父はどこに。病室にいたんじゃないんですか」

叔母は嘆息して答えた。

「このところずっと病院に泊まり込んでたから、少しこの家で休んでっていったの。でも間が悪かったわね。おじいちゃん、急に体調を崩して、お医者様が駆け付けたときにはもう……。それで病院の方から連絡を入れたのだけど、行き違いになっちゃったみたいね」

あの留守電は父に宛てたものだったようだ。

叔母は言葉継いだ。

「ホントに急だったわ。このところずっと意識がなかったから、どのみち、お別れの言葉は言えなかったかもしれないけど」

そして今度は疲れを隠さずに嘆息した。体格のよかった叔母が、心なしかやつれているように見えた。

「それじゃ、斎場に行きましようか。星奈ちゃんは、最後までおじいちゃんに会えなかったしね」

斎場は実家のすぐ近くにあった。受付にいた親戚に挨拶して、通夜の会場に入る。会場はひっそりとして、ほとんど人がいなかった。叔母は目頭を軽くおさえて、祖父のもとに案内してくれた。

「おじいちゃん、星奈ちゃんですよ。」

叔母が硝子越しに、棺の中に眠る祖父に語りかけた。結局生きているときには会えなかった、私の祖父。死に顔には、深いしわが刻まれ、どこか憂いを帯びているように見えた。私は何だかいたたまれない気分になって、線香を手向けると、足早に踵を返した。

斎場を出て、実家に帰り着く。玄関には、見覚えのある靴があった。古ぼけた革靴。父のものだ。家の中は薄暗かった。ふと、奥の部屋に目をやると、ふすまが少し開いていて、そこからわずかな光がもれていた。私は音を立てないようにして家に

上がると、ふすまの間から部屋の中をのぞき見た。

「おとうちゃん」

部屋の片隅で、父が肩を震わせていた。

父は、泣いていた。

一人娘の私の出立のときも、唇をきつと結んで決して涙を見せなかった父が、むせび泣いていた。

父のそばには、薄汚れた望遠鏡が、寂しそうに転がっていた。